



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第3回】

「常州佐竹祖」源義業よしなりと武田氏祖先は兄弟

甲斐・武田氏は常陸・武田郷の出身

JR常磐線で水戸駅から勝田駅方面に向かうと、列車は那珂川を渡り、水田地帯を過ぎ、台地にさしかかる。その台地の南端に武田氏発祥の地がある。日立方面に向かう国道6号を利用するなら、ひたちなか市の「市毛十文字」を右折。陸上自衛隊勝田駐屯地方面に向かい、「本町交差点」を右折。進行道路左側の武田地区住宅街を通り抜けて武田氏館たけだうじやかたの建物を目指す。同館の前に湫尾神社ぬまおがある。その鳥居脇に「甲斐武田氏発祥の地」の記念碑が建っている。

武田氏といえば、武田信玄しんげんが有名だ。川中島（長野市）で上杉謙信けんしんと戦った名将として知られている。その武田氏の始祖が中世の常陸国吉田郡武田郷（ひたちなか市武田）に住んでいた。その名を源義清よしみよという。昭和63年（1988）発行の『勝田市史』（中世・近世編）は、勢力拡大を狙った義清と子清光の親子が在地勢力から「清光濫行」と告発された。このため義清親子は甲斐国市河庄に「配流」され、甲斐・武田氏の祖となる、と述べている。「市河庄」は現在の山梨県西八代郡市川三郷町周辺地域と考えられている。

平成16年（2004）発行の『山梨県史』（通史編）もこれを追認する。そのうえで「義清・清光の入国は大治五年の翌年（天承元年〔1131〕）ごろとみてよい。流人るにんといっても武人として名声ある清和源氏一族の義清は、甲斐の在地武士に迎えられ、そのまま土着するのである」と述べている。南北朝後期から室町時代初期に編さんされた系図集、『尊卑分脈』に義清は「武田冠者」とある。系図上、義清の孫にあたる信義から武田姓を名乗っている。その子孫から戦国時代、映画やドラマ等で有名な晴信（信玄）が誕生する。

義清は佐竹氏の祖先・義業の弟

源義光よしみつの子は、『武田系図』（「続群書類従巻第百二十一」）によると、長男義業よしなり、二男実光、三男義清、四男盛男、五男親義が記載されている。注書きに次のような語句がみえる。義業「常州佐

竹祖」、実光「住伊豆国」、義清「配流甲斐国市河庄（庄）」、盛義「平賀祖」、親義「住信濃国」とある。『尊卑分脈』は義業の次が義清と書かれて、兄弟の数も7人となっている。系図によって兄弟の記載人数に違いはあるが、「常州佐竹祖」となる義業と甲斐国市河庄に「配流」となった義清は兄弟であることに変わりはない。

源義清に対する関心は、山梨県にとどまらず、出身地にも根強く残っている。ひたちなか市は平成6年（1994）11月、勝田市と那珂湊市が合併して誕生した。その合併を目前に控えた勝田市で同年8月、「第20回かつた祭り」が開催された。その中で勝田市制40周年を祝う「武田軍団の出陣式」が繰り広げられた。平成6年9月発行の『市報かつた（No.733号）』は「武田冠者義清にふんした清水昇市長が『エイエイオー』の勝ちどきを上げると、子供武者軍団を含む総勢250人の武田軍団が一斉に立ち上がり、（以下略）」と、その時の様子を伝えている。

このように義清に対する地元の関心は高い。しかし、義清の兄である義業はどうであろうか。「常州佐竹祖」・源義業はあまり知られていない。兄弟でありながら、その認知度の差はどこからくるのか。武田氏と佐竹氏の知名度の差がそのまま、反映されているようにみえる。しかし、佐竹氏は幾多の困難を乗り越え今日まで脈々と家名を繋いでいる。佐竹氏は戦国時代、北関東の盟主として北条（後北条）氏、伊達氏と戦い、一步も引かなかった。常陸国を統一し、豊臣政権下で、全国3位の運上金うんじょうきんを納めた。その経済力をバックに文化面で今に伝わる重要文化財を数多く輩出した。これらの基礎は「常州佐竹祖」である義業が築いた、といっても過言ではないのである。

義業、常陸平家と婚姻関係を結ぶ

義業は、江戸時代、久保田藩（秋田県）が編さんした『佐竹家譜』に次のように書かれている。「承暦元年（1077）生る。字は刑部太郎。左衛門尉さえもんのかみに任じ、進士判官しんしはんかん。進んで従五位下に叙し相模守さかのもりを兼ね。刑部丞義光の長子。母は甲斐守知宗（注・

仲宗とも)の娘(以下略)」とある。ただ、『佐竹家譜』記載の歴代当主の中で、義業の記述は極めてわずか。父義光の影に隠れてしまったか、「常州佐竹祖」といわれながらその事績が明らかになっていない。

しかし、義業は、佐竹氏誕生を考えるうえで2つの重要な足跡を残した、と筆者はみている。その1つが常陸平家と姻戚関係を結んだことである。『常陸大掾系図』(続群書類従第百三十九)は、桓武天皇から始まる常陸平家の系図のひとつ。「良望(改国香)」から始まり、繁盛—維幹—為幹—繁幹と記載が続いている。繁盛は「陸奥守鎮守府将軍」。良望の子孫は大掾職に就く者もいた常陸国を代表する在地勢力だった。義業はこの繁幹(重幹とも)の二男清幹の娘を妻にした。清幹は中世の常陸国で俗称吉田郡(中心は水戸市吉田)に拠点を置き、清幹の子たちは鹿行地域にも勢力を伸ばしていた。

父義光は長治元年(1104)の前後4~5年間、「常陸国合戦事」を起こしている。朝廷から義光に召喚命令が出た時、平繁幹も呼び出されている。2人は一緒に戦っていた。その相手は甥の源義国だった。朝廷は源義家に子の義国を連れて参れ、という召喚命令を出している。当然、義業も父と共に戦っていたと考えられる。義光にとって「常陸国合戦事」は「後三年合戦」に次ぐ人生をかけた戦だった、と筆者はみている。しかし、合戦の目的や合戦場所は未だ明らかになっていない。ただ、明らかな点は、義光父子の戦いに常陸平家が関与した、ということである。

平家の藤原氏とも婚姻関係構築へ

義業を「常州佐竹祖」と位置付けるうえで常陸平家との繋がりに加え、もう一つ重要な要素がある。それが公家の日記『長秋記』(「増補史料大成

第17巻)にみえる奥州藤原氏とのコンタクトである。大治5年(1130)6月8日条に「件清衡妻上洛、嫁檢非違使義成」とある。清衡は大治3年(1128)に亡くなった。清衡の子の間で家督争いがあった後、清衡の妻「北方平氏」は入京した。北方は北の方(奥方)。平氏は平氏の出身という意味。なんと、『長秋記』はこの「北方平氏」が当時、檢非違使になっていた義業(成)に嫁いだ、と書いているのである。

清衡の後を継いだ2代目、藤原基衡は、「北方平氏」の子と考えられている。従って基衡からみると、母の再婚相手である義業は、義理の父にあたる。義業は京都で「北方平氏」と一緒になった。親子関係の濃淡はさておき、形のうえで義業は奥州に強大な勢力をもつ藤原氏と繋がった。父義光も後三年合戦で清衡と共に戦っている。親子2代で奥州の覇者、藤原氏と接点を持つことができたことになる。陸奥国は常陸国と接している。しかも、陸奥国は金の産出国である。いわば、憧れの地である。

義光は大治2年(1127)、73歳で亡くなった。自らの力で前途を開かなければならなくなった義業は、常陸平氏と姻戚関係に加え、今また奥州藤原氏とも接点ができ、義業は「常陸国合戦事」の経験を踏まえ、次の戦略を練っていたことであろう。しかし、「北方平氏」と結婚してわずか3年後の長承2年(1133)、この世を去った。『佐竹家譜』は「年57」と書いている。義光が亡くなって6年後のことである。義業は父の思いを受け継ぎ、常陸佐竹氏を興す条件を一生をかけて整えた、といえる。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



「甲斐武田氏発祥の地」の記念碑が建つ湫尾神社。同神社の裏手に平成3年、勝田市(ひたちなか市)が建てた「武田氏館」がある＝ひたちなか市武田
(筆者撮影)